日本古代通史・連載第 23 回

後期・邪馬台国の時代②
～神夏磯媛と豊比売命～

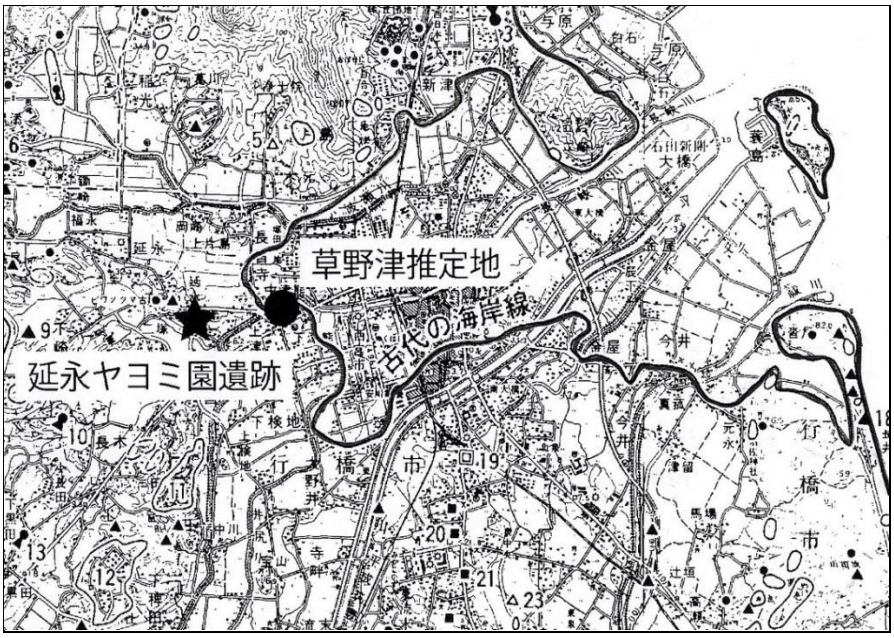
河村哲夫

草野の津

古代の京都平野には、豊前海・周防灘おける中核的な港があった。

草野（かやの）の津である。

前述した延永ヤヨミ園遺跡の近傍にあった。



平安時代に編纂された法令集『類聚三代格』に、

「豊前国草野津」

とみえ、『豊前志』【中津藩渡辺重春著・文久三年（1863）】には、

「草野村の津なり。往昔はこの辺まで海なりき。この津は公私の船の専ら着きし処にて、新任の国司の下らるにも、またこの津に着船ありしなり。今は海も漸くに浅くなりゆきて、海辺を少し離れたり」

とある。

少なくとも平安時代ごろまでは草野の津が港としての機能を保持していたことは確実であるが、江戸時代末には土砂の堆積や干拓などによって港の機能は失われてしまった。

現代では完全に陸地化して、むかし港であったことは想像もできない。

しかしながら、古代人にとって、流れが速く危険な関門海峡にくらべれば、豊前の草野の津ははるかに安全な港であった。

しかも豊前・豊後各地への陸のアクセスも意外に良好である。

それを裏づけるように、各時代の古代伝承が重層的に残されている。

(1) 宗像三女神伝承

宇佐から宗像に向かう宗像三女神はこの地に上陸して嘉穂・鞍手方面に向かったという(『福岡県神社誌』など)。

(2)景行天皇伝承

景行天皇は長峡川流域に長峡の行宮を置いたという(河村哲夫著『景行天皇と日本武尊』原書房・2014)。

(3)神功皇后伝承

宇美・嘉穂・田川・香春方面からやってきた神功皇后はこの地から宇佐に向かったという(河村哲夫著『神功皇后の謎を解く』原書房・2013)。

(4)神武天皇伝承

日向から船でやってきた神武天皇もこの地から上陸し、陸路で田川・嘉穂・御笠郡方面に向かったという(『福岡県神社誌』など)。

これらの古代伝承は、行橋の地――草野の津が海の玄関口として、きわめて重要な役割を果たしていたことを示している。

邪馬台国時代においても、草野の津は投馬国(投与国＝豊の国)の海の玄関口であったろう。

すでに述べたように、『魏志倭人伝』の投馬国まで水行 20 日について、【10 日(帯方郡→末盧国)＋10 日(末盧国→投馬国)】とみれば、末盧国の呼子から 10 日ほどでこの地に到達する。

筑紫国の筑紫神社に相当する豊日別神社(行橋市南泉 7-13-11) もある。

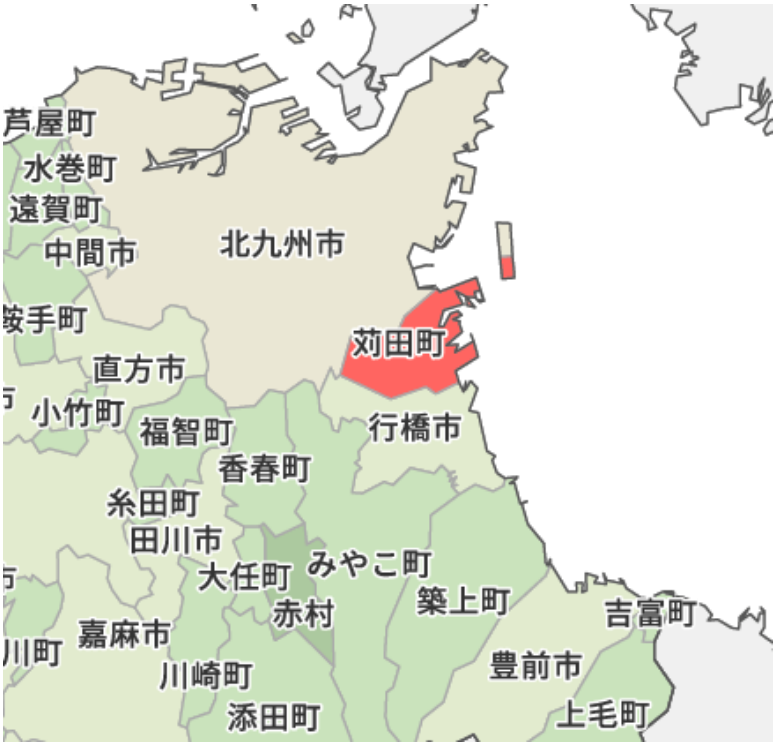
欽明天皇即位の年、すなわち 5 世紀前半ごろの創建というが、京都平野の一角のこの地に創建されたのは、ずっと古い時代から豊の国＝投馬国の拠点的な場所――京都(みやこ)と認識されていたからであろう。

国名	別名	神社名	祭神	所在地
筑紫	白日別	筑紫神社	筑紫神(白日別神)	福岡県筑紫野市原田
豊	豊日別	豊日別神社	豊日別大神	福岡県行橋市南泉

京都(みやこ)の起源

行橋市は、もと京都郡(みやこぐん)に属する。北側と西側に隣接する苅田町とみやこ町は現在も京都郡である。

<table>
<tr><td rowspan="4">京都郡</td><td rowspan="2">行橋市</td><td>行橋町</td><td>京都郡行事村・仲津郡大橋村・仲津郡宮市村
※行事村＋大橋村→「行橋」</td></tr>
<tr><td colspan="2">泉村・今川村・今元村・椿市村・仲津村・延永村・稗田村・蓑島村
および祓郷村の一部</td></tr>
<tr><td>苅田町</td><td colspan="2">苅田町(村)・小波瀬村・白川村</td></tr>
<tr><td>みやこ町</td><td colspan="2">豊津町・勝山町・犀川町</td></tr>
</table>



ところで、京都(みやこ)の起源について、二つの文献がある。

一つは、『日本書紀』の景行天皇 12 年の記事である。

十二年の秋七月に、熊襲反きて朝貢らず。
八月の乙未の朔己酉に、筑紫に幸す。
九月の甲子の朔戊辰に、周芳の娑麼に到りたまふ。時に天皇、南に望みて、群卿に詔して曰はく、「南の方に烟気多く起つ。必に賊在らむ」とのたまふ。則ち留りて、先づ多臣の祖武諸木・国前臣の祖菟名手・物部君の祖夏花を遣して、其の状を察しめたまふ。爰に女人有り。神夏磯媛と曰ふ。其の徒衆甚多なり。一国の魁帥なり。天皇の使者の至ることを聆きて、則ち磯津山の賢木を抜りて、上枝には八握劍を挂け、中枝には八咫鏡を挂け、下枝には八尺瓊を挂け、亦素幡を船の舳に樹てて、参向て啓して曰さく、「願はくは兵を止しそ。我が属類、必に違きたてまつる者有らじ。今将に帰徳ひなむ。唯残しき賊者有り。一をば鼻垂と曰ふ。妄に名号を仮りて、山谷に響ひ聚りて、菟狭の川上に屯結めり。二をば耳垂と曰ふ。残ひ賊り、貪り婪きて、屢人民を略む。是御木木、此をば開と云ふ。の川上に居り。三をば麻剝と曰ふ。潜に徒党を聚めて、高羽の川上に居り。四をば土折猪折と曰ふ。緑野の川上に隠れ住りて、独山川の険しきを恃みて、多に人民を掠む。是の四人は、其の拠る所並に要害の地なり。故、各眷属を領ひて、一処の長と為る。皆曰はく、『皇命に従はじ』といふ。願はくは急に撃ちたまへ。な失ひたまひそ」とまうす。是に、武諸木等、先づ麻剝が徒を誘る。仍りて赤き衣・褌及び種種の奇しき物を賜ひて、兼ねて服はざる三人を撝さしむ。乃ち己が衆を率て参来り。悉に捕へて誅しつ。天皇、遂に筑紫に幸して、豊前国の長峡県に到りて、行宮を興てて居します。故、其の処を号けて京と曰ふ。

「(景行天皇)12 年の秋七月に熊襲が叛いて税を納めなかった。(そこで景行天皇は)九月五日に筑紫(九州)にお出ましになった。九月五日に周防の佐波(山口県防府市)に到着なされた。時に天皇は南の方をご覧になり、随行した者たちに『南の方に煙が大層立ち昇っている。必ずや賊がいるであろう』とおっしゃられた。そこで天皇はそのまま佐波にとどまられ、多臣の先祖の武諸木、国前臣の先祖の菟名手、物部君の先祖の夏花を先遣隊として派遣し情勢を探らせれた。そこには女性がいた。名は神夏磯媛という。仲間は大勢いた。一国(豊の国)の魁師(首長・支配者)であった。天皇の使者が訪れることを聞いて、磯津山(貫山)の榊を根っこから引き抜いて、上の枝には八握剣、中の枝には八咫鏡、下の枝には八尺瓊を下げかけ、また白旗を船の舳先に立てて海上で出迎えた。そしてみずから出迎えて、『どうか兵を送らないでください。私の仲間は決して叛くことはありません。すぐにでも帰順いたします。ただほかに悪い賊がいます。その一人を鼻垂(はなたり)といいます。王を気取って山谷に人を呼び集め、宇佐の川上(駅館川)にたむろしています。二人目を耳垂(みみたり)といいます。人を損ない破り、むさぼり食い、人民を掠めています。これは御木(みけ)(上毛・下毛)の川上(山国川)にいます。三人目を麻剥(あさはぎ)といいます。ひそかに仲間を集めて、高羽(田川)の川上(彦山川)にいます。四人目を土折猪折(つちおりいおり)といいます。緑野の川上(緑川＝深倉川)に隠れており、険しい山川を利用して人民を掠めとっています。この四人のいるところは要害の地であります。それぞれが、仲間を従えた首長です。みな皇室の命令には従わない、といっています。すみやかに討たれるのがいいでしょう。逃さないようにすべきです』と言上した。そこで、武諸木らはまず麻剥の仲間らを誘って赤い布、衣服やさまざまな珍しい物を与え、さらにはほかの反抗的な三人もおびき寄せると彼らは仲間と一緒に出向いてきたので、全員捕らえて殺した。そこで景行天皇は九州に渡られ、豊前国の長峡県に行宮を建てて滞在なされた。このため、その地を名づけて『京(みやこ)』という」

このように、『日本書紀』は、景行天皇が長峡行宮を置かれたことから京都(みやこ)という地名が発生したと記している。

しかしながら、「みやこ」という地名はもっと古い時代にさかのぼるという説がある。

安本美典氏は、『季刊邪馬台国』(41 号)のなかで、邪馬台国卑弥呼の宗女の台与(とよ)の都は、京都郡であった可能性がある、とされる。

「京都という地名は、景行天皇の時代よりも、もっと早くからあったとみてよいであろう。とすれば、この地が極めて古い時代に、ほんとうの都であった可能性もでてくる」

とし、卑弥呼の死後、邪馬台国の中心地は筑紫から豊国に移り、拠点が置かれたために京都と呼ばれるようになったとされる。

筆者は、『古事記』『日本書紀』にしばしば記される地名説話は、もともと地域で呼びならわしていた地名を、天皇あるいは皇族などの権威によって、公に認知し、一般化する儀式を伝えるものではないかと考えている。

たとえば『日本書紀』には、「夏四月三日、北方の肥前国松浦県(まつうらのあがた)に行き、玉島の里の小川のほとりで食事をされた。皇后は針を曲げて釣針をつくり、飯粒をえさにして、裳(も)の糸を取って釣糸にし、川の中の石に登って、釣針を垂れて神意を伺う占いをおこない、『私は西

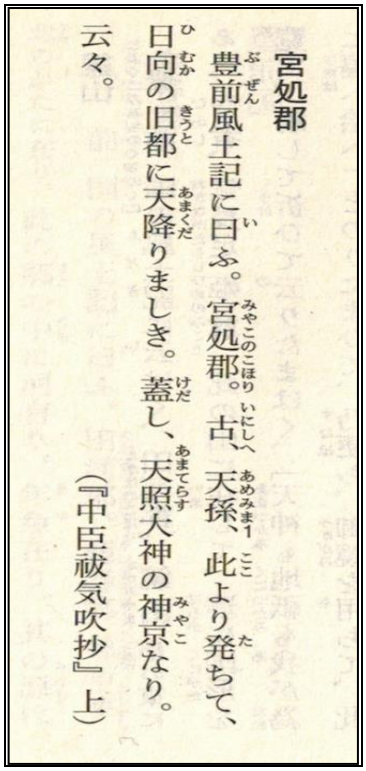
の方の財宝の国を求めています。もし事を成すことができるなら、川の魚よ釣り針を食え』といわれた。釣りざおを上げると鮎（あゆ）がかかった。皇后は『珍しい魚だ』といわれた。ときの人はそこを名づけて、梅豆羅国（めずらのくに）という。いま松浦というのはなまったものである。それでその国の女たちは、四月の上旬になるたびに、針を垂らして年魚（あゆ）を取ることが今にも絶えない。ただし、男は釣っても魚を取ることができない」と書かれている。

『肥前国風土記』にも、ほぼ同様の記事が載せられている。

しかしながら、梅豆羅国（めずら）＝希見国（めずら）＝松浦(まつら)という地名は、『魏志倭人伝』にすでに「末盧（まつろ）国」として登場しており、神功皇后がはじめて命名した地名ではない。

安本美典氏の指摘どおり、「京都(みやこ)」という地名も、景行天皇が長峡行宮を置く以前から「みやこ」と呼ばれていた可能性を否定することはできない。

京都(みやこ)の起源についての、もう一つの文献は、江戸時代の多田義俊(1698～1750)の『中臣祓気吹抄（なかとみの・はらえ・いぶきしょう）』に引用された『豊前(国)風土記』逸文の記事である。


宮処郡
豊前風土記に曰ふ。宮処郡。古、天孫、此より発ちて、日向の旧都に天降りましき。蓋し、天照大神の神京なり。云々。
（『中臣祓気吹抄』上）

宮処郡
豊前風土記にいう。宮処郡。むかし、天孫(ニニギノミコト)がここから出発して、日向の旧都(高千穂)に天降りなされた。この地が天照大神の神京(みやこ)であったからである。

京都郡には天照大神の都があり、ニニギノミコトはこの地から日向に天降ったとする――衝撃的な記事である。

しかしながら、多田義俊は大阪の国学者・神道家として知られた人物であったが、伊勢安斎（1717～1784）によると、「偽りを好む癖あり、彼の著書に引用する古書の名には、信じがたきものあり」(『安斎随筆』)と評されている。

したがって、この『豊前(国)風土記』逸文の記事も出典不明で捏造された可能性があるが、それにしても意表の着想であり、「つくり話としても、もっともらしい話である」という安本美典氏の評も頷ける。安本美典氏は豊の国を投馬国とみておられるからである。

神夏磯媛(かむなつそひめ)

それはともかくとして、『日本書紀』に記された神夏磯媛のことである。

(1) 神夏磯媛は「一国(ひとくに)の魁師(ひとごのかみ)」

魁師(ひとごのかみ)とは、首長・首領・王・支配者などという意味である。しかも、女性である。

したがって、神夏磯媛は「豊の国の女王」というような意味である。

(2) 神夏磯媛は三種の神器を船に飾って出迎え

神夏磯媛は、磯津山【伝承では貫山(北九州市小倉南区)と伝わる】で得た榊の上枝に八握剣、中枝に八咫鏡、下枝に八尺瓊を下げて、船で出迎えた。

天の岩戸の祭祀に用いられた神器(ただし二種)および景行天皇を出迎えた神夏磯媛と仲哀天皇・神功皇后を出迎えた九州の豪族らの三種の神器の状況は次表のとおり。

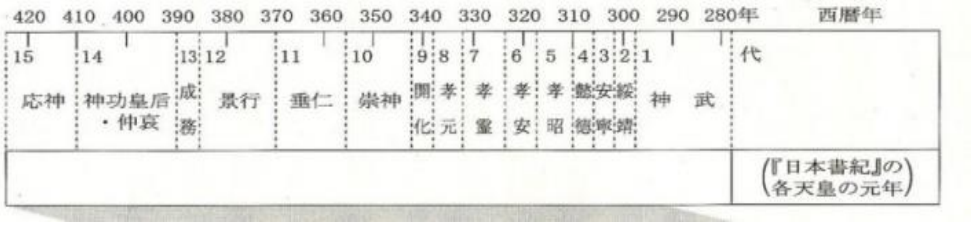
	上枝	中枝	下枝	根拠文献
天の岩戸	八尺瓊	八咫鏡	木綿・麻	『古事記』
神夏磯姫	八握剣	八咫鏡	八尺瓊	『日本書紀』景行天皇紀
熊鰐	白銅鏡	十握剣	八尺瓊	『日本書紀』仲哀天皇紀
五十迹手	八尺瓊	白銅鏡	十握剣	『日本書紀』仲哀天皇紀

神夏磯姫は上から剣・鏡・玉の順に下げているのに対し、熊鰐は鏡・剣・玉、五十迹手は玉・鏡・剣の順に下げているが、氏族や身分を示すような意味かしきたりがあったのであろうか。

『日本書紀』によると、五十迹手は、「私がこの玉・鏡・剣を献上いたします理由は、天皇が八尺瓊のように丸く天下を治められ、白銅鏡のように山川や海原を明るく御覧になされ、十握剣で天下を平らかにしていただきたいからでございます」と言上したという。

すでに述べたように、玉・鏡・剣を格別珍重し、墓に埋納する風習は「奴国の時代」にはじまる。

景行天皇と神夏磯媛の時代は、安本美典氏の統計的年代論によれば 4 世紀後半のこととなる。



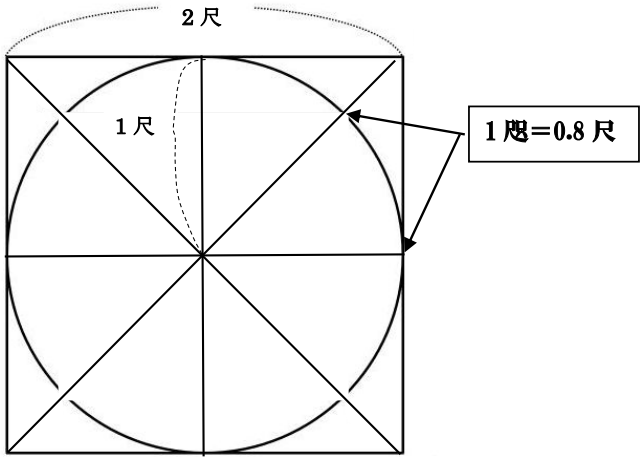
神夏磯媛が三種の神器を船に飾って出迎えたのは、大和朝廷成立後はじめて九州を訪れた天皇に向かって先祖が同祖であることをアピールするものであったかもしれない。

八咫鏡と八尺瓊といえば、天皇家に伝わる神器とおなじ名称、おなじ大きさをあらわしている。

これまた本連載の第 1 回で述べたように、直径二尺(46.5 センチ)、半径一尺の円周の長さは八咫となり、平原遺跡から出土した大型鏡(5 面)とおなじ大きさである。

	半径	直径	円周率	円周	
平原大型鏡	1 尺 (23.2 ㎝)	2 尺 (46.5 ㎝)	(3.2)	6.4 尺 (2 尺×3.2)	8 咫 (6.4 尺×1.25)

※　1 寸＝2.3 ㎝、1 寸×10＝1 尺、0.8 尺＝1 咫、1 尺＝1.25 咫



八尺瓊は、直径 2 尺の巨大な勾玉のことをさすのではなく、勾玉のネックレスのヒモの直径が二尺(46.5 センチ)という意味であろう。

したがって、景行天皇時代に豊の国(豊前・豊後)を治めていた女王は、天皇家の三種の神器のうち、八咫鏡と八尺瓊を共有する人物であったことになる。

これはきわめて重大な問題である。

前述したとおり、「台与＝投与(投馬)＝豊」とみれば、台与は九州の豊の国(福岡県・大分県)に拠点――都を置いた女王である。

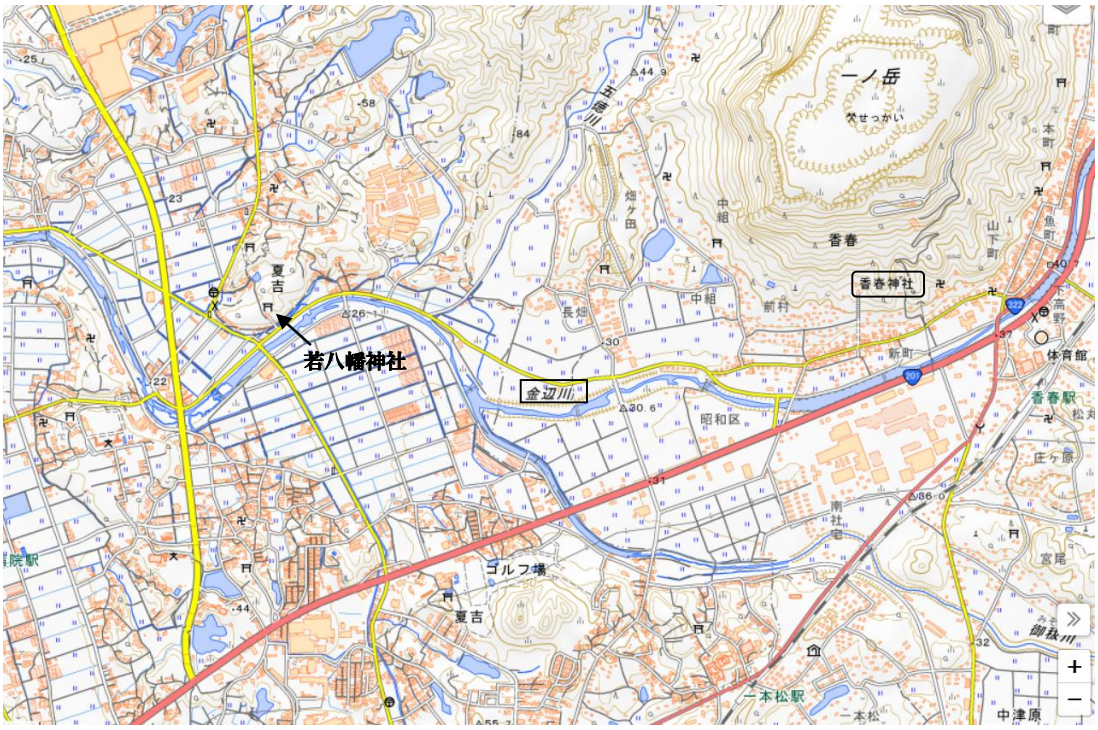
「卑弥呼＝天照大神」であるならば、「台与＝万幡豊秋津師比売命」である。

景行天皇時代に八咫鏡と八尺瓊を保有して豊の国を治めていた神夏磯媛は、台与＝万幡豊秋

津師比売命と何か関係があるのではないか。というより、神夏磯媛は、台与＝万幡豊秋津師比売命の末裔ではないのか。邪馬台国の女王台与の血統を継いだ九州における最後の女王が神夏磯媛ではないのか。――そのような思いが当然のごとく湧いてくる。

神夏磯媛を祭る若八幡神社

景行天皇時代に豊の国を治めていた神夏磯媛は、若八幡神社(田川市夏吉)に祭られている。しかも、若八幡東方わずか約 2 キロの距離に、香春神社(田川郡香春町)がある。



まず、若八幡神社が所在する夏吉という土地のことである。

実は、夏吉という地名は、江戸時代までは夏羽焼村あるいは夏焼村であったという。

筆者の『神功皇后の謎を解く』(原書房・2013)には、次のように記している。

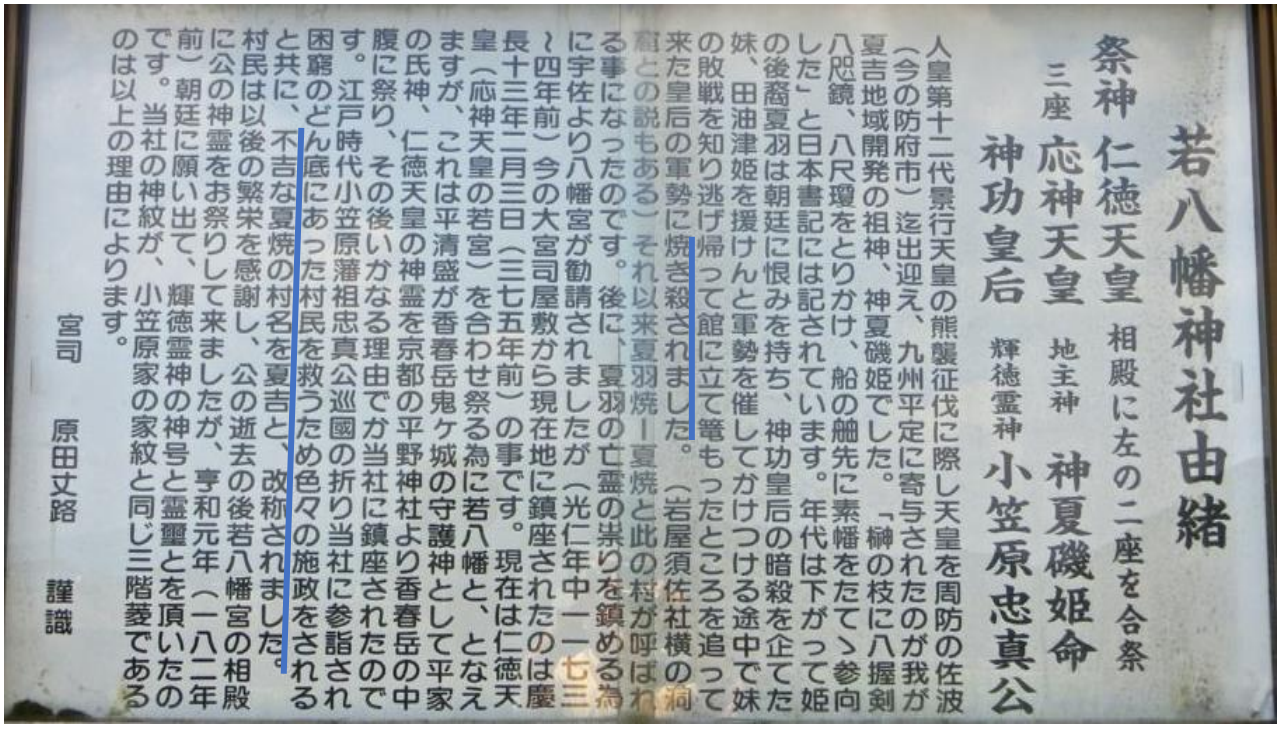
> 神功皇后のまさに電撃的な作戦によって、山門に進攻し、田油津媛を討伐した。
>
> 田油津媛の兄の夏羽(なつは)は妹を支援するために兵を引き連れてやってきたが、すでに妹が殺された後であり、そのため逃げ去ってしまった。
>
> 『日本書紀』は、兄の夏羽がどこから来て、どこに逃げたのかは書いていない。羽白熊鷲が朝倉郡から浮羽郡にかけての山岳地帯に勢力を張っていた山岳系の部族であったことから、夏羽はその南側の八女郡から山門郡、肥後の玉名郡にかけての山岳地帯を支配した山岳系の部族であった思われる。
>
> <u>ところが夏羽の伝承が、朝倉郡から北東に山越えした田川市の夏吉(なつよし)に残っているのである</u>。

夏吉は遠賀川支流と金辺（きべ）川の間に位置し、江戸時代以前は夏焼（なつやき）と呼ばれた文書が残っているのである。

『飛廉起風』によると、もともと「夏羽焼」であったらしく、「金川村大字夏吉はむかし夏羽焼村といった。神功皇后が熊襲征伐のとき、田油津媛を討たれた。田油津媛の兄夏羽は妹を助けようと軍を進めたが、間に合わず妹はすでに誅殺されたと聞き、逃れて帰ってきたが、皇軍の追撃は激しく、この地の岩穴に逃げ込んだのを焼き殺されてしまったという。いま夏吉というのは、夏羽焼が転じたのである」と書かれている。

ただし、『日本書紀』景行天皇十二年九月の条に「神夏磯媛」という豊前の女酋の名が見え、景行天皇が周防の佐波（山口県防府市佐波）から南の方角を眺めると煙が立ち上っていたため、賊がいるのではないかと物部氏の先祖の夏花らに偵察に行かせたところ、一国の首長で京都郡あたりを拠点にしていた神夏磯媛がいて従順を誓ったという伝承が記されている。さらに、地域の伝承ではこの神夏磯媛が一族の田油津媛と夏羽を討伐したという。

景行天皇の伝承と神功皇后の伝承が混同されているような感じがし、これらの伝承の精度については、やや疑問があるというべきであろうが、いずれにしても、夏羽などの山岳系の部族の活動範囲が筑前・筑後地方から豊前あたりまでのかなり広い範囲に及んでいたことを示すものといえよう。

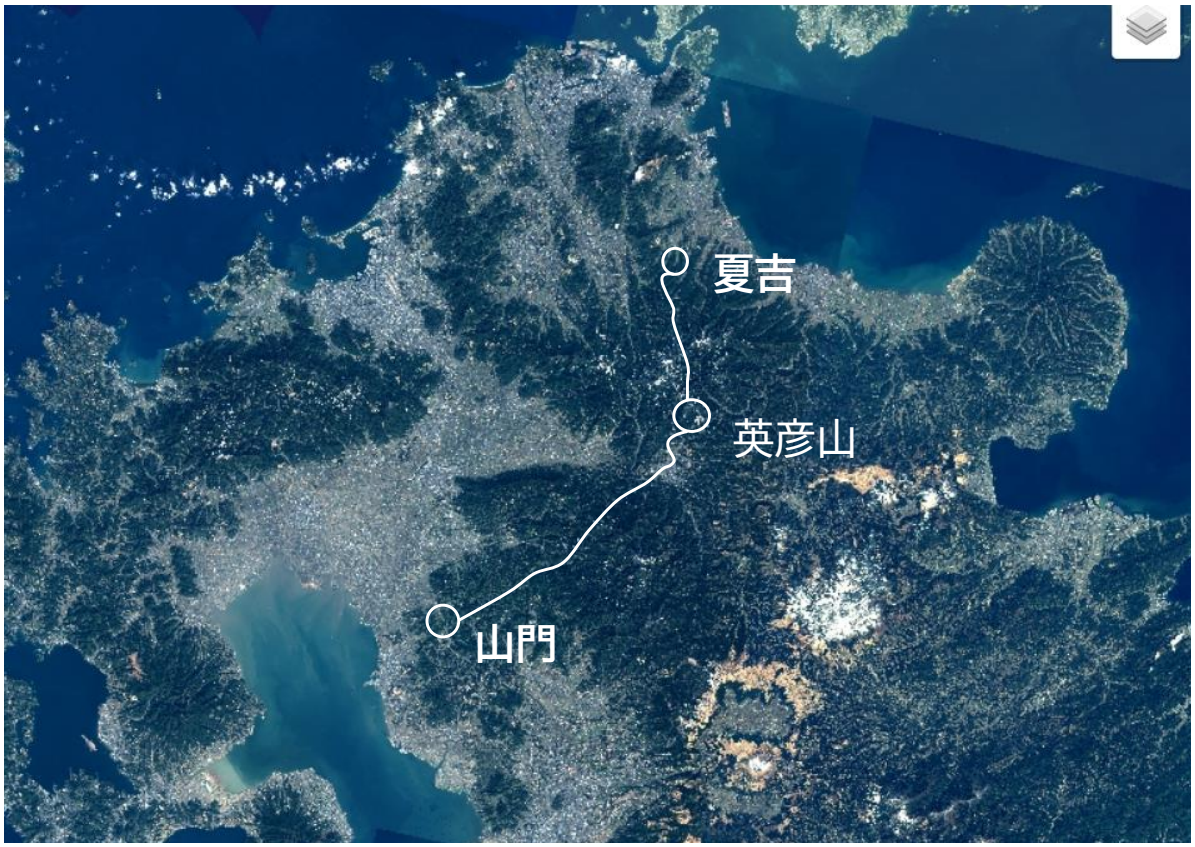


若八幡神社の看板

『日本書紀』によれば、香椎宮において仲哀天皇が崩御されたのち、神功皇后は朝鮮出兵の前に、甘木朝倉方面を拠点とする羽白熊鷲を討伐し、その後宝満川から筑後川を下り、有明海に出て矢部川河口の山門の地に至り、田油津媛を討伐した。兄の夏羽が救援に駆けつけたものの、すでに妹が討伐されたことを知って、いずれかに逃走した。

『日本書紀』にはその具体的な逃走先は記していないが、『飛廉起風』(福岡県・1923)などによると、夏羽が逃れたのが田川市の「夏吉」の地で、追撃してきた皇軍によって焼き殺されたために「夏羽焼村」になったというのである。

しかも、神夏磯媛が同族の田油津媛と夏羽を討伐したとも伝わる。



田川市夏吉の若八幡神社は、仁徳天皇、応神天皇、神功皇后及び神夏磯媛を祭神としている。

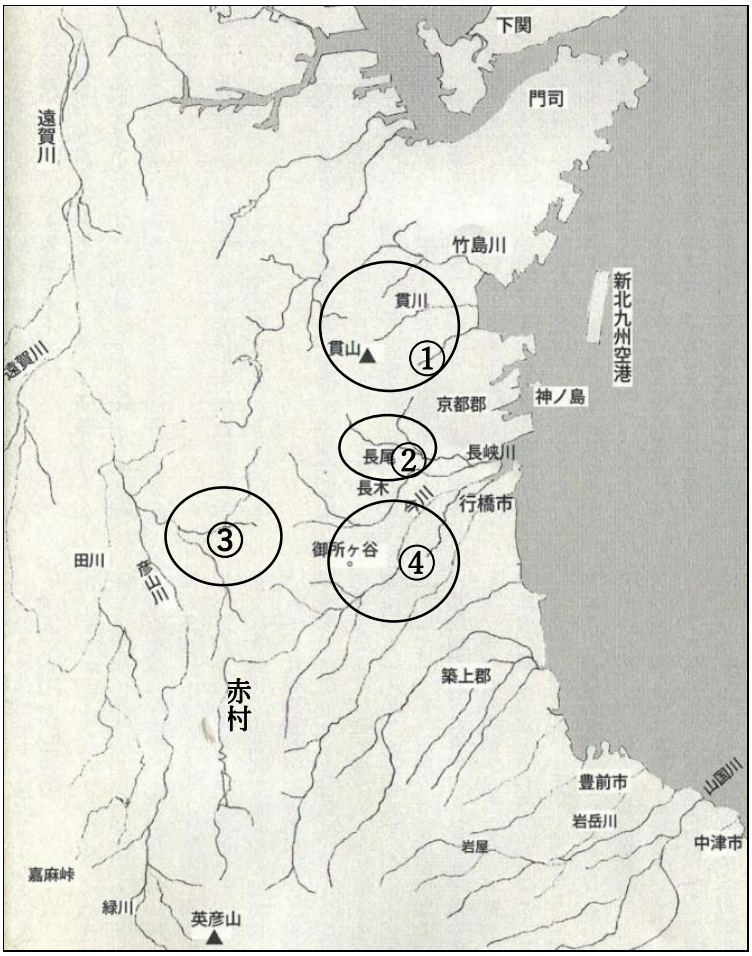
神功皇后は宇美八幡の地で応神天皇を出産したのち、この地を経由して行橋の草野の津に至り、宇佐方面に船で向かったという。

福岡県内には数多くの若宮神社が祭られているが、神功皇后とともに若宮(応神天皇)を祭っているケースがほとんどである。かつ、応神天皇の子の仁徳天皇を若宮として祭る例も多い。

なお、『日本書紀』には神夏磯媛がどこに拠点を置いていたのか記されていないが、神夏磯媛を祭る若八幡神社付近か、京都平野の一角にあった可能性が高いであろう。

神夏磯媛の拠点候補地

① 説	貫山～貫川説	神夏磯媛が榊を採取した山	○
② 説	長峡川流域説	景行天皇の長峡の行宮	○長峡の行宮自体が不詳 ○6 世紀初頭～中頃の古墳群(みやこ町) ・寺田川古墳・扇八幡古墳・八雷古墳 ・箕田丸山古墳・庄屋塚古墳など 庄屋塚古墳(90 m)は、この時期における豊前地域最大級の前方後円墳
③ 説	田川市夏吉	神夏磯媛を祭る若八幡神社	◎有力 丘陵地には福岡県内有数の古墳群がある。夏吉 1 号墳、21 号墳など 40 数基が確認されている。豊富な花崗岩で様々な形態の石室古墳が築造されている。
③ 説	京都平野	京都平野のいずれかの地	◎有力



香春神社

前述したとおり、若八幡神社(田川市夏吉)の東方約 2 キロに香春神社(田川郡香春町)がある。

五木寛之の『青春の門』の舞台になったことで有名である。

香春は古い地名で、『豊前国風土記』逸文によると、もともと地内を流れる清らかな川にちなんで「清河原(きよかわら)」と名づけられたが、それがなまって「鹿春(かはる)」と呼ばれるようになったという。『万葉集』には、「加波流」と書かれている。

『豊前国風土記』逸文には、「昔新羅の神が自分で海を渡って来着いて、この河原に住んだ。すなわち名づけて鹿春の神という」とあり、「鹿春の神」、すなわち「香春の神」が朝鮮の新羅から渡来してこの地に定住したことを記している。

香春神社は延喜式内社で、香春三山(一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳)のうち、一ノ岳に辛国息長大姫大目命(からくにおきながおおひめのおおまのみこと)、二ノ岳に忍骨命(おしほねのみこと)、三ノ岳に豊比畔命(とよひめのみこと)がそれぞれ祭られていたが、和銅二年(709)に一ノ岳山麓に社殿を造営して合祀したという(『福岡県神社誌』)。

国	郡	香春岳	神社名	祭　神
豊前国	田川郡	一ノ岳	辛国息長大姫大目命神社	辛国息長大姫大目命
		二ノ岳	忍骨命神社	忍骨命
		三ノ岳	豊比畔命神社	豊比畔命

忍骨命

忍骨命とは、もちろん天忍穂耳命のことで、『日本書紀』第九段第七の一書にも天忍骨命と表記されている。

これまで述べた【英彦山→岩石山→赤村・油須原】という経路に、「香春」が加わったことになる。

赤村の油須原から香春までは約 7.5 キロ。徒歩で日帰りできる距離である。

おそらく日田あるいは朝倉などの筑紫平野方面から英彦山に移動した天忍穂耳命は、やがて赤村の油須原に拠点を構え、そして何らかの理由によって香春に通ったのであろう。

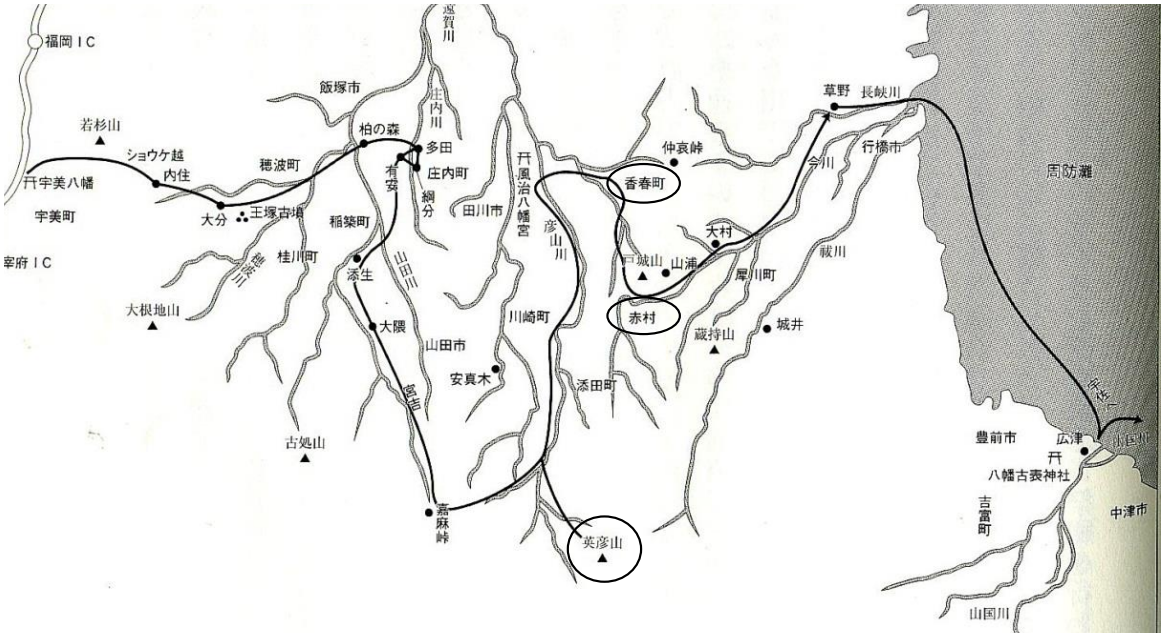
香春神社には、忍骨命(天忍穂耳命)のほか、辛国息長大姫大目命と豊比咩という二人の女性が祭られている。

辛国息長大姫大目命

辛国息長大姫大目命とは、もちろん息長帯比売命、すなわち神功皇后のことである。

九州大学名誉教授であった田村圓澄氏(1917～2013)は新羅から渡来した女神とされたが、もちろん戦後流行した渡来人崇拝と神功皇后抹殺論に基づくものであることはいうまでもない。

下図のとおり、宇美八幡神社の地で応神天皇を出産した神功皇后は、嘉穂郡を経て香春の地を通過している。



神功皇后の経路(河村哲夫著『神功皇后の謎を解く』原書房)

この経路に沿って多くの神功皇后伝承が残されており、いずれにしても、香春神社に祭られている辛国息長大姫大目命とは、息長帯比売命＝神功皇后のことである。

しかも、第 14 代仲哀天皇の皇后である。したがって、神功皇后はのちの時代に追加された祭神であることは明らかである。

【福岡県の神社(アクロス福岡文化誌・海鳥社)より】

かわらじんじゃ・こみやはちまんじんじゃ

香春神社・古宮八幡神社

新羅系渡来氏族の神と宇佐へ奉納された神鏡

新羅の神を祀る

田川盆地の北東部で、一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳からなる香春岳を神体山とする神社。『延喜式』神名帳の「豊前国六座」のうち、「田川郡三座」に香春三神の名が見える。一ノ岳に辛国息長大姫大目命、二ノ岳に忍骨命、三ノ岳に豊比咩命が祀られていたのを、和銅二（七〇九）年、一ノ岳南麓に社殿を造立して合祀したという。

『豊前国風土記』逸文に「昔、新羅国の神が渡来してこの地の川原に住んだので鹿原の神といった」とあるが、神が渡来したということは、その神を奉祀した人々の来住を意味している。同書には二ノ岳から銅が産出されていたことを記しており、三ノ岳には採銅の跡があって、「採銅所」の地名を残している。銅の採掘、精錬の技術を持った新羅系の渡来氏族がこの地に定住したということで、それらの人々の祀っていたのが一の岳の神であろう。辛国は韓国に通じる。

宇佐神宮へ宝鏡を奉納した古宮

三ノ岳の豊比咩命は山麓の阿蘇隈に祀られていたが、一ノ岳南麓の下香春の宮に合祀されたので、元の社を「古宮大神」と唱えていた。新羅神が祀られる以前からの地主神であろう。その後、養老四（七二〇）年、宇佐八幡神の託宣により、三ノ岳から発掘された金銅で宇佐神宮の御正体の御神鏡を鋳造して放生会に奉納、八幡神を勧請して古宮八幡神社と称するようになった

香春神社の拝殿

という。

明治二十一（一八八八）年までは香春神社の神幸祭に神輿が加わっていたが、その後は古宮八幡神社だけで神幸祭を行うようになっている。

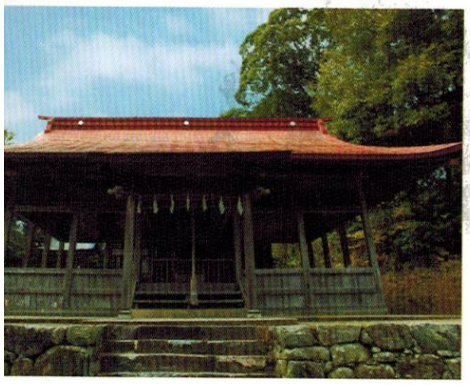
古体を残す神幸祭

香春神の名が中央にまで知られるようになったのは、延暦年間（七八二―八〇六）に最澄が渡唐の無事を祈って参籠し、山麓に神宮院を建立したのに始まる。最澄の斡旋により香春神社は比叡山王の別社となり、一ノ岳山頂には山王権現が祀られた。香春岳は全山石灰岩の露出した山だったが、最澄が寺を建て読経をしてからは草木が繁茂し、旱魃や疫病の災いが起こるたびに郡司や農民が祈願すると必ず感応があったという。

江戸時代には田川郡の総社として、雨乞いや災害の折には郡内の主だった神社の神輿が香春神社に集まって祈願を籠め、三月十五・十六日の神幸祭には郡内の大庄屋らが出仕し、田川郡規模の祭りで盛大を極めた。現在の神幸祭は五月四・五日で、三体の神輿が長い行列を作り、お旅所までの往復をしている。

古宮八幡神社の神幸祭は現在四月最終の土曜日と日曜日。神輿の屋根を杉の葉で葺いているので前日に神輿作りをする。初日の朝、神社から辛櫃を担いで、代々御神鏡鋳造に関わっていた長光家へオマガリ様を迎えにいく。龍の形をした小さな餅というが、秘事とされ見ることができない。その後、御神鏡を鋳造したという清祀殿跡の裏を流れる禊川でお潮井を採って神社に戻る。午後に神輿への神遷しがあって神社を発御。古宮音頭を歌いながら地区の中を通り、村外れの天照皇大神社で祭典を行った後、神社下のお旅所でお通夜をする。翌日は午後にお旅所で祭典を行い、神輿が清祀殿跡を経て神社に還御する。

［佐々木］



上：香春神社境内の山王石。昭和14年に一ノ岳より転がり落ちてきたもの
下：古宮八幡神社の拝殿

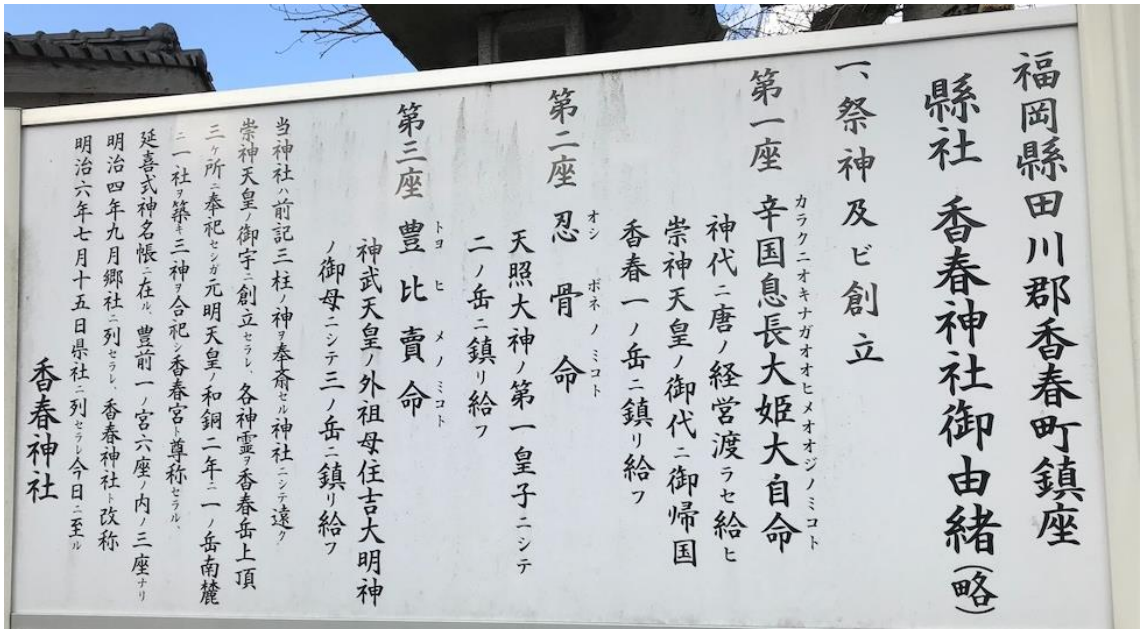
所在地　［香春］田川郡香春町香春七三三／［古宮八幡］田川郡香春町採銅所二六一一
祭神　［香春］辛国息長大姫大目命・忍骨命・豊比咩命／［古宮八幡］豊比咩命・神功皇后・応神天皇
メモ　セメント工業の石灰石採掘で、一ノ岳が原型を留めぬまでに削りとられてしまっている。

豊比売命

香春神社に祭られているもう一人の女性が豊比**売**命である。

天忍穂耳命とともに祭られているから、当然妃の万幡豊秋津師比売命のはずである。

ところが、香春神社の由緒や掲示板などでは、神武天皇の外祖母――つまり、豊玉姫のこととされている。



豊玉姫の夫は山幸彦で、天忍穂耳命ではない。

天忍穂耳命の妃は万幡豊秋津師比売命で、豊玉姫ではない。

豊比売命は、豊玉姫なのか、万幡豊秋津師比売命なのか？

豊姫問題

これを、仮に「豊姫問題」と名づけよう。

複雑でややこしい話なので、できたら避けて通りたかったが、古代史におけるきわめて重要な問題なので、問題提起という意味を込めて、これから述べてみたい。かなりマニアックな話になるので、関心のない方は飛ばし読みされたらよろしかろう。

香春神社所蔵の『豊前国香春神社御縁起』(元禄四年・1691)のなかに、

「延喜式神名帳の筑前国御笠郡の竈門神社と同じく豊比咩命のことである。また同じく筑後国三井郡の豊比畔神社で祭られている豊比咩命と与止日女命のお二人はいずれも神功皇后の御妹に当たり、八幡宮(応神天皇)の御姑(叔母)である」

と記されている。

『延喜式神名帳』によれば、筑前国御笠郡の竈門神社(宝満宮竈門神社・太宰府市内山)の祭神は玉依姫命・応神天皇・神功皇后とされている。

玉依姫命はもちろん豊玉姫の妹で、初代神武天皇の母とされる人物であるが、『筥崎宮縁起』な

どでは、玉依姫命を神功皇后の姉とし、応神天皇(八幡神)の伯母としている。※

しかしながら、香春神社の縁起では、竈門神社で祭られているのは豊比咩命とされている。

神社名	所在地	祭　神
香春神社	田川郡香春町	豊比咩命 社伝では豊玉姫
竈門神社	太宰府市内山	玉依姫命 香春神社の縁起では豊比咩命

次に、香春神社の縁起に出てくる筑後国三井郡の豊比咩神社というのは、おなじく『延喜式神名帳』に登載されている豊比咩神社のことで、現在の赤司八幡宮(久留米市北野町赤司)がその有力候補とされている。

祭神は道主貫【比咩三女神(宗像三女神)】・豊比咩(止誉比咩・豊姫)・与止比咩・息長足姫尊(神功皇后)・高良大神(玉垂命)・八幡大神(応神天皇)・住吉大神(住吉三神)である。

このうち豊比咩と与止比咩は、香春神社の縁起とおなじく、神功皇后の妹にあたる人物とされる。

なお、御井郡の豊比畔神社のほかの候補としては、上津天満宮(久留米市上津町)境内社の豊姫宮があり、祭神の豊姫(豊比咩命)は高良大社の祭神・玉垂命の配偶神とされている。

また、豊姫神社(久留米市北野町大城)は豊玉姫を祭り、戦後に廃社となった旧県社豊姫神社(久留米市御井町)も豊玉姫を祭っている。

『延喜式神名帳』の御井郡の豊比畔神社の候補

神社名	所在地	祭　神
赤司八幡宮	久留米市北野町赤司	豊比咩(止誉比咩・豊姫)・与止比咩 二人とも神功皇后の妹という
豊姫宮	久留米市上津町 (上津天満宮の境内社)	豊姫(豊比咩命) 高良大社の玉垂命の妃
豊姫神社	久留米市北野町大城	豊玉姫 山幸彦の妃
豊姫神社	久留米市御井町(旧県社)	豊玉姫 山幸彦の妃

以上、豊姫が誰であるかという伝承をまとめれば、次のとおり。

1	万幡豊秋津師比売命とする伝承	なし
2	豊玉姫とする伝承	香春神社・豊姫神社(北野町)・豊姫神社(御井町) 豊玉姫と玉依姫は姉妹でいずれも山幸彦の妃 玉依姫は神武天皇の母(古事記・日本書紀)
3	神功皇后の妹とする伝承	赤司八幡宮 豊姫と淀姫は姉妹で神功皇后の妹 ただし『古事記』では神功皇后の妹は虚空津比売一人
4	高良玉垂命の妃とする伝承	豊姫宮(上津町)

2 の山幸彦の妃の豊玉姫とする伝承と、3 の神功皇后の妹とする伝承について比較してみよう。

豊玉姫は初代神武天皇の叔母に当たり、神功皇后は第 14 代仲哀天皇の皇后であるため、時間的な順序でいえば、【2 豊玉姫→神武天皇→3 神功皇后】となる。少なく見積もっても、おそらく 200 年以上の隔たりがあろう。したがって、豊玉姫・玉依姫姉妹が神功皇后の妹であるはずがない。

では、何ゆえ豊玉姫・玉依姫が神功皇后の妹という伝承が生じたのか。

そのヒントは、御陵の宝満宮(大野城市中1丁目)の社伝に残されている。

『筑前国続風土記附録』に記されている。

仲村　本編（一九二）に見えたり。

寶滿宮　神殿一間一間半・祭禮九月十八日・奉祀大谷伊與

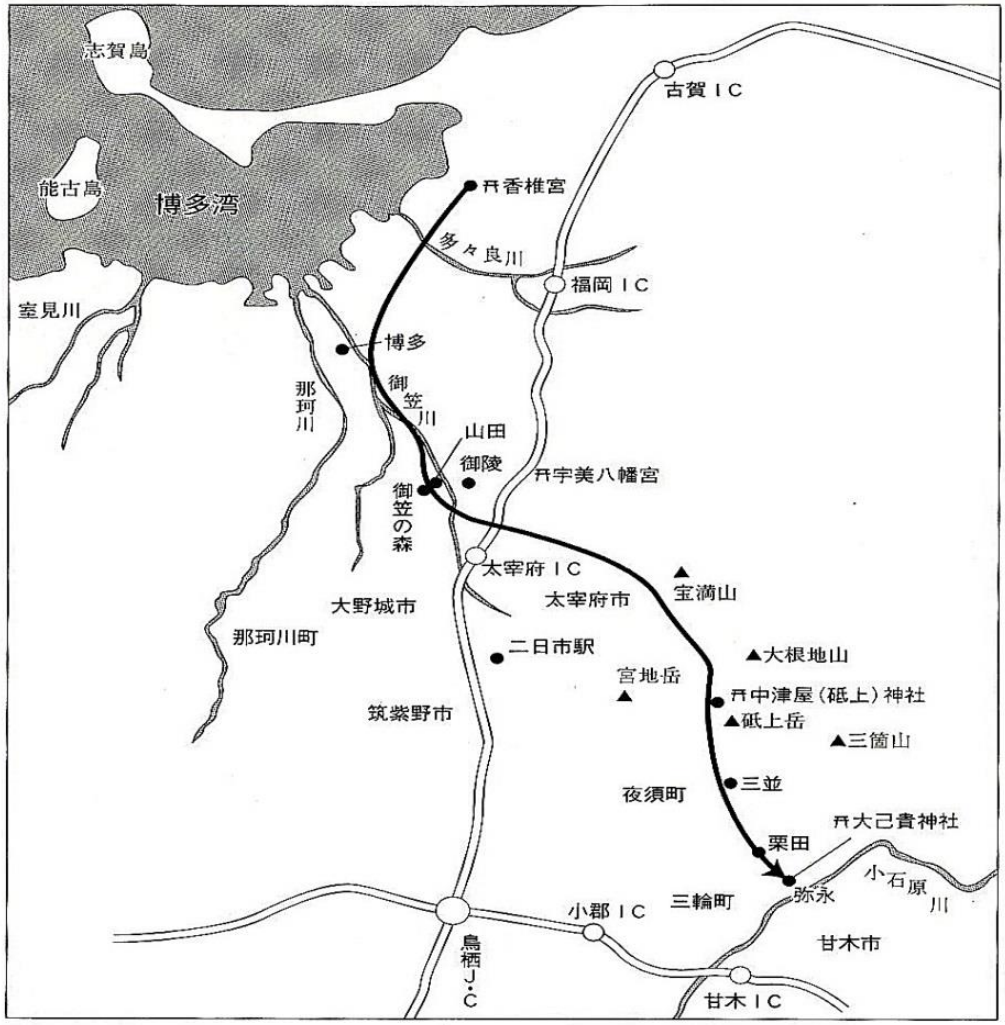
支村五領にあり。玉依姫を祭る。年毎に九月十八日に祭禮あり。此所の産神と崇む。社傳に、玉依姫命此所にまし〳〵てかみあがりし給ふ。因て御陵を築き、神廟を建てあかめ祭れり。人皇十二代景行天皇の御宇、熊襲といふ賊皇命に逆きしかハ、天皇自ら筑紫に下らせ給ひ、熊襲を征伐したまふ。此時御陵の宮に御祈願ありて、賊を平らけたまふ。神功皇后も三韓を征し給ふ時、此神廟に祈りたまふ。皇后に姉妹の御約の神託あり。檍か原の玉依姫命の御廟に詣給ひしと舊記にあるハ、此時のことならんと云。又荷鳥田村といふ所に、羽白熊襲といふ土蜘蛛いたりしをも討平け給ふ。此ときも、御陵の宮の神助を得給ひ、御利運ましませしとなん。齊明天皇七年、朝倉の木の丸殿に御坐しける時、敕願にて御陵の宮再建し給はんことありしに、其年崩し給ふ。天智天皇元年辛酉九月、宮柱ふとしき立て、同月十八日神を移し奉らる。十年庚午十月二十二日、太子大友皇子・左大臣蘇我赤兄・大臣兼連、朝議を請(こい)たまひ、秦友兄といふ人を、奉幣使とし御陵號を改め、寶滿宮と敕號をまいらせられ、敕額一扁・御劔三振・幣帛をさゝけられ、邑人二人をゑらばれ、中臣正光・佐々保氏と氏を賜り、御宮を司とらせ給ふ。御廟ハ二間半ニ三間、瑞垣あり。樓門有て壯麗なる御社にて、神領をも餘多寄附せられ、繁榮の御社なりしとぞ。文武天皇白鳳年中、藤原廣嗣を敕使とし、天智天皇御奉納の御劔を、御廟の北なる地中に埋め給ふ。其印に大石立り。これを大嶽塚といふとかや。ヲゝタケハ御太刀の轉語なるへし。かゝる由ある御廟なりしかとも、天正年中兵燹(へいせん)にかゝり、御陵廟も燒失し、敕額・神寶等も烏有となり、僅に御陵の印にハ、松樹のミ殘れり。今の神社ハ、御廟の松の東、たかき所林の中、西にむかひ建り。

○寶滿宮　センシヤウジヤマのふもとにあり。延寶三年正月御陵の宮より勸請せりといふ。

○八大龍王森　ハチリウ　天神森　サキノカド

○河神森　トウノワキ　○藥師堂二宇　ウラノヤシキ　センシヤウジ

大日堂　サキノカド　○觀音堂　ゴリヤウ



「玉依姫命がこの地においでになって亡くなられた。よって御陵を築き、神廟を建てて崇め祀った。十二代景行天皇の時代に熊襲という賊が皇命に背いたので、天皇みずから賊を平定なされた。この時、景行天皇は御陵の宮に祈願なされて熊襲を征伐された」

「神功皇后も三韓を征しなされるとき、この神廟にお祈りなされた。<u>このとき、玉依姫から神功皇后と姉妹の契りを約束する神託があった</u>」

ちなみに、この玉依姫の御陵といわれるものは、後世になってかなり荒れていたらしく、斉明天皇七年（661）に朝倉の木の丸殿に都が置かれたとき、勅命で御陵の宮を再建しようとしたが、その年に斉明天皇が急死したために、天智天皇元年（662）年九月にとりあえず太い宮柱を建て、九月十八日に神を移し奉ったと記されている。

そして、天智天皇十年（671）十月二十二日に、大友皇子(おおとものみこ)はじめ、左大臣蘇我赤兄(そがのあかえ)などの大臣や重臣を集めて朝議を開き、秦友兄(はたのともえ)という人物を奉幣使(ほうへいし)として派遣し、御陵の名を宝満宮と改めるとともに、村人のうちから二人を選び、正光と佐々保という氏を与えて、宝満宮の宮司とした。

文武天皇時代、白鳳年間(650～654)には藤原広嗣(ふじわらのひろつぐ)を勅使として派遣し、

天智天皇が奉納した剣を御廟の北側の地中に埋め、その目印に大きな石を立てた。

『筑前国続風土記附録』では、その大石は大嶽（おおたけ）塚ではないかとしている。御太刀（おたち）が「おおたけ」になまったのではないかと考えるわけである。

宝満宮の御廟は、二間半（約 4.54 メートル）・三間（約 5.45 メートル）の大きさであり、瑞垣に囲まれ、楼門もあって、壮麗な神社であった。

しかしながら、天正年間（1573～1592）の戦国の争乱によって焼失し、勅額や神宝類も失われ、御陵の跡には松の木だけが残ったという。

近くにある大野城市立御陵中学校という名称は、この御陵にちなむものである。

神功皇后は、仲村の玉依姫の御陵と御廟に参詣し、神託により玉依姫と姉妹の契りを結んだわけである。

以上により、玉依姫が神功皇后の妹という伝承は、この地で生まれたとみてさしつかえなかろう。

そして、後世になって、この伝承に姉の豊玉姫が付け加えられたのであろう。

前述したように、香春神社の縁起では竈門神社の祭神は豊比咩命とされているが、豊姫神社（久留米市北野町）・豊姫神社（久留米市御井町）の祭神とおなじく豊玉姫とみるべきであろう。

ところで、赤司八幡宮（久留米市北野町）の祭神は、豊姫と淀姫姉妹とされている。

このことから、豊姫＝豊玉姫、淀姫＝玉依姫という関係が成り立ちそうである。

以下、このことを検証してみよう。

與止日女（よどひめ）神社

嘉瀬川（川上川）の上流に與止日女神社（佐賀市大和町大字川上）がある。延喜式内社、旧県社であり、河上神社とも称し、淀姫神社とも書く。『三代実録』は、豫等比咩と書く。

祭神は與止日女であり、神武天皇の祖母の豊玉姫とする説と神功皇后の妹とする説が伝えられている。

6 キロほど上流の佐賀市富士町にある淀姫神社の祭神は豊玉姫とされている。

一方で、『肥前国風土記』は、

「この川上に石神がある。名は世田姫（よたひめ）という。海の神（鰐魚（わに）と呼ぶ）が毎年毎年流れに逆らって潜り上ってこの神のもとに来る。海の底に小魚がたくさん従って上る。その魚を恐れかしこむ人には災いがないが、またその反対に人がこれを捕って食うと死ぬことがある。すべてこの魚たちは二、三日とどまって、また海に帰る」

と書いている。

世田姫と與止日女は、発音がよく似ている。

おそらく、もともとはこの嘉瀬川（川上川）流域を統治していた女王が風土記の伝える世田姫であったとみられる。

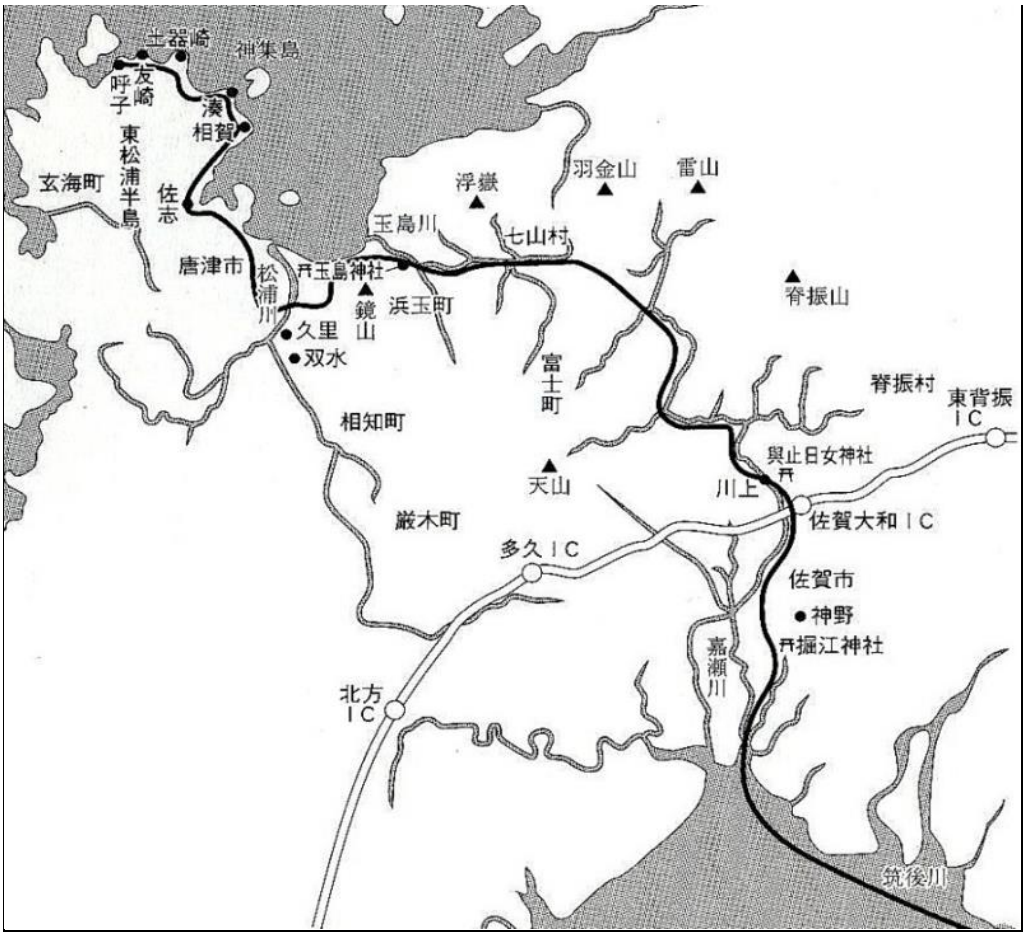
ところが、時代が下り、大和朝廷による支配が進むにつれて、一女酋たる世田姫を祭神とすることにはばかりが生じ、中央の権威に連なる人物を祭神とする必要が生じたに違いない。

そこでまず世田姫＝與止日女＝豊玉姫という連想が働き、その上に神功皇后伝承が付加され

たのであろう。與止日女神社の社伝によると、

「神功皇后が朝鮮に進出のおりに、海神を祭り、航海の安全と戦勝を祈った。神功皇后の妹に当たる與止日女命は(阿曇)磯童とともに鯰に乗って龍宮に到り、満珠・干珠をもたらした。凱旋したのち、満珠・干珠はこの神社に納められた」

とある。



「與止日女」「豊玉姫」「神功皇后」「妹」というキーワードを満足する説明としては、もともとこの神社は與止日女(世田姫)を祭神としていたが、その神社に神託で豊玉姫の義理の姉妹になった神功皇后がやってきて、朝鮮出兵に向けて航海の安全と武運を祈った。その結果、祭神の與止日女(世田姫)が豊玉姫に転じた、というような解釈が穏当なところであろうか。

しかしながら、前述のとおり、赤司八幡宮(久留米市北野町)の祭神は豊姫と淀姫とされ、「淀姫＝玉依姫」と解したが、佐賀の與止日女神社では「淀姫＝豊玉姫」となっている。佐賀市富士町の淀姫神社の祭神も豊玉姫であり、やはり「淀姫＝豊玉姫」である。

那珂川市の伏見神社

那珂川上流の那珂川市に伏見神社がある。

欽明天皇二十五年(564)十一月一日に前述した肥前川上の與止日女神社(河上神社・淀姫神社・佐賀市大和町大字川上)の祭神である神功皇后の妹の與止日女(川上大明神)をこの地に祭ったという。

また、後の時代に京都伏見の御香宮(こうのみや)から神功皇后を移して「伏見の宮」と称するようになったという。祭神は、天照大神の弟のスサノオ、大山祇神、神功皇后、武内宿禰、および與止日女である。

神集島の淀姫

佐賀県唐津市に神集島がある。江戸時代の神集島の庄屋であった菊地武儀所蔵の古文書のなかに、

「神功皇后、新羅、百済を制し給ひしひしより安永十年（1781）まで丸尾の辻に一村の松樹あり。これ即ち皇后の陣なり。前左右に神森あり。これ則ち諏訪住吉の陣なり。武内大臣、椎武王（わかたけのみこ）、遠津別王（とおつわけのみこ）、淀姫、日本国中の諸臣、この和珥津より出船し給ふ。神集島と云ふは此の故なり」

というものがあったという（佐藤林賀著『開国五千年史』）。

椎武王とは、神功皇后の夫であった仲哀天皇の実弟である。遠津別王というのは、仲哀天皇の異母弟とされる十城別王（とおきわけのみこ）のことである。そして、淀姫は神功皇后の妹であるという。しかも、身重の神功皇后に代わって朝鮮に出兵したという。

『古事記』によると神功皇后に妹はいたが、虚空津比売命という名で、淀姫という名ではない。

まとめ

これまでの述べてきたことを統合すると、次のとおりとなる。

【A】豊姫・豊比咩・止誉比咩 【B】豊玉姫 【C】玉依姫 【D】与止比咩・與止日女・淀姫

【E】神功皇后の妹 【F】天忍穂耳命 【G】高良玉垂命

神社名	所在地	祭　神	A	B	C	D	E	F	G
香春神社	香春町	豊比咩命（社伝では豊玉姫）	○	○				○	
竈門神社	太宰府市	玉依姫命 （香春神社縁起は豊比咩命）		○	○				
赤司八幡宮	久留米市北野町	豊比咩（止誉比咩・豊姫）・与止比咩 （二人とも神功皇后の妹という）	○			○	○		
豊姫宮	久留米市上津町	豊姫（高良玉垂命の妃）	○						○
豊姫神社	久留米市北野町	豊玉姫（山幸彦の妃）		○					
豊姫神社	久留米市御井町	豊玉姫（山幸彦の妃）		○					
御陵の宝満宮	大野城市	玉依姫命 （神功皇后と姉妹の神託あり）			○		○		
與止日女神社	佐賀市大和町	與止日女 （豊玉姫説と神功皇后の妹説）				○	○		
淀姫神社	佐賀市富士町	豊玉姫・玉依姫命（淀姫＝豊玉姫）		○	○				
肥前国風土記	佐賀市大和町	世田姫（嘉瀬川流域の女王か）	△						
伏見神社	那珂川市	與止日女（神功皇后の妹）		○	○		○		
神集島	唐津市	淀姫（神功皇后の妹） （神功皇后に代わって朝鮮出兵）				○	○		
			3.5	6	4	3	5	1	1

区分	項 目	評点	割合	備　考
A	豊姫・豊比咩・止誉比咩・豊姫	3.5	14.9	
B	豊玉姫	6.0	25.5	
C	玉依姫	4.0	17.0	
D	与止比咩・與止日女・淀姫	3.0	12.8	
E	神功皇后の妹	5.0	21.2	
F	天忍穂耳命	1.0	4.3	香春神社(田川郡香春町)
G	高良玉垂命	1.0	4.3	豊姫宮(久留米市上津町)
		計 23.5	100.0	

(1) 豊玉姫の伝承が多い

【A】豊姫・豊比咩・止誉比咩＋【B】豊玉姫＋【D】与止比咩・與止日女・淀姫＝53.2%を占め、福岡・佐賀両県において、およそ半数の人々によって「豊比咩＝豊玉姫＝淀姫」と認識されている。

(2) 豊玉姫・玉依姫姉妹の伝承が多い

玉依姫単独で 17.0%を占めているが、豊玉姫＋玉依姫＝42.5%を占めている。山幸彦の妃となった豊玉姫と玉依姫の伝承の豊かさがが福岡・佐賀の一つの特徴といえようか。

(3) 豊比咩命が天忍穂耳命とともに祭られているのは香春神社だけである。

よって、香春神社で祭られている豊比咩命は、天忍穂耳命ときわめて密接な関係を有する女性――すなわち、妃の万幡豊秋津師比売命である可能性が高いと判断できよう。

以上、「豊姫問題」について縷々述べてきたが、あくまで筆者の現時点における暫定的な結論にすぎない。

実は、この「豊姫問題」については、さらに検討すべき課題がある。

それは、伊勢神宮外宮に祭られている豊受大神との関係である。やはり「豊」が含まれている。

『古事記』によると、豊受大神はイザナミの子の和久産巣日神(わくむすび)の子とされている。

要するに出雲系である。高天原系ではない。

しかしながら、豊玉姫と万幡豊秋津師比売命との関係とおなじく、豊受大神と万幡豊秋津師比売命の関係もあやふやに混同されているふしがある。

ただし、この問題については、ニギハヤヒの丹波進出と関連するテーマなので、ずっと先のほうで詳しく述べさせていただきたい。

(以下、つづく)